

JACET関西支部 2025年度 第1回支部講演会

The JACET Kansai Chapter 1st Lecture Meeting of the 2025 Academic Year

言語学の研究成果をどう英語教育に活かすか？

コーパス言語学・心理言語学からの展望

・第1発表 石川慎一郎 先生(神戸大学教授)

ISHIKAWA, Shin'ichiro PhD (Professor, Kobe University)

「コーパス言語学から英語教育へ」

・第2発表 門田修平 先生(関西学院大学名誉教授)

KADOTA, Shuhei PhD

(Emeritus Professor, Kwansei Gakuin University)

「心理言語学から英語教育へ」

・両名対談「言語学と言語教育をどうつないでいくか？」



○企画趣旨: 言語学と言語教育をどうつないでいくか？ 言語学は本当に英語教育の改善に役立つのか？ 両者の連携を強めていくために必要なことはなにか？ これらは、今なお、古くて新しい問いとして私たちの前に残されています。今回の企画では、言語学と言語教育学の両方の分野で仕事をしてきた関西支部の2名の先生に、これまでの研究と今後の展望についてお話しいただきます。

Date: Saturday **June 21, 2025, 15:20–17:00**

Venue: online (Zoom)

Fee: JACET 会員は無料、非会員は参加費 500 円

JACET members (free of charge); non-members (¥ 500)

※事前申込要。※ Preregistration required.

申し込み: 昨年度から Peatixを導入しています。以下のリンクにアクセス頂き、「チケットを申し込む」をクリック、JACET会員は無料をお選びください。非会員の方は有料(500 円)をお選び頂き、所定の方法でお支払いください。

申し込みリンク <https://peatix.com/event/4387467/view>

* 当日の zoom URLは、Peatixより後日送られます案内をご覧ください。

お申込みは右のQRコードからでも可能です。



▶発表言語: 日本語, 質疑応答: 日本語, 英語

▶ This lecture will be given in Japanese. The Q&A session will be bilingual.

👁 For more information, please visit the JACET Kansai Chapter Website <http://www.jacet-kansai.org>

第1発表 石川慎一郎 先生(神戸大学教授)コーパス言語学から英語教育へ

英語教育におけるコーパス活用の利点が多いが、特に重要となるのは、(1)目標言語の使用実態を明らかにして教材等に反映できることと、(2)学習者言語の特性を明らかにして教授に応用できることにあると思われる。これらは、依拠するデータの性質の違いに伴い、「英語コーパス分析」と「英語学習者コーパス分析」として整理できる。本発表では、発表者自身の過去の実践を含め、これらの2つの方向でどのような研究がなされてきたかを紹介し、コーパスを活用した英語教育の方向性を論じる。あわせて、「コーパス準拠英語教育研究」の抱える悩ましい制約や限界、また、生成AI時代におけるコーパスのレゾナードトル(が本当にあるのか?)についても言及したい。

(講師紹介)神戸市生まれ。神戸大学卒業。神戸大学大学院・岡山大学大学院修了。博士(文学)。神戸大学大学教育推進機構／国際文化学研究科／数理・データサイエンスセンター教授。専門はコーパス言語学・応用言語学・英語学・日本語学ほか。これまでに英語コーパス学会会長、北京外国語大学招聘教授他を歴任。現在、文化審議会国語分科会委員(言語資源小委員会副主査)、計量国語学会副会長、中国語話者のための日本語教育研究会副代表、文部科学省日本語教師養成・研修推進拠点整備事業近畿ブロック拠点代表ほかを務める。The ICNALE Guide: An Introduction to a Learner Corpus Study on Asian Learners' L2 English(Routledge, 2023),『ベーシックコーパス言語学(2版)』(ひつじ書房, 2021/2023),『ベーシック応用言語学(2版)』(ひつじ書房, 2023)ほか。

第2発表 門田修平 先生(関西学院大学名誉教授)心理言語学から英語教育へ

かつて英語教育研究とは、直接教室での教授法・指導法の開発を目的としたものであった。これに対し、心理言語学研究成果を英語教育に活かそうとするアプローチは、「心理言語学的SLA研究」と呼ばれる。これは、英語など第二言語の処理・獲得の心的(認知)プロセスを研究し、その「知的いとなみ」を可能にする心の仕組みをあきらかにするという観点からの英語教育・教授法研究である。この観点から、これまで蓄積されてきたデータや知見の一端を紹介し、今後のこのアプローチの方向性について展望する。

(講師紹介)専門は第二言語習得研究。これまで、第二言語としての英語が、どのようにして知覚・処理され、記憶・学習されるかそのメカニズムについて研究してきた。最近では、「社会脳インタラクション」をもとにした社会認知システムからのアプローチが加わった。主著は次のとおり。2002年『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか』くろしお(JACET学術賞)、2010年『SLA研究入門』くろしお、2015年『シャドーイング・音読と英語コミュニケーションの科学』コスモピア、2018年『外国語を話せるようになるしくみ』SBクリエイティブ、2019年Shadowing as a Practice in Second Language Acquisition. Routledge、2023年『社会脳インタラクションを活かした英語の学習・教育』大修館、2024年『AIフル活用！英語発信力トレーニング』コスモピア。